

## 資料

## ドイツ語読解の戦略と戦術 (7)

——大学における高等普通教育と外国語教育の意義と機能——

2019年9月

早稲田大学商学部

原 口 厚

## 0. はじめに

外国語教育は諸外国では一般的に初等・中等教育で行われる。しかし日本ではドイツ語をはじめとする英語以外の外国語教育は一般的に大学において行われる。これは周知のように、敗戦後の学制改革によって、ドイツであればギムナージウム (Gymnasium)<sup>(1)</sup>の上級段階に相当する旧制高校あるいは大学予科が廃止され、そこで行われていた高等普通教育の一部が新制大学の〈教養課程〉に移管されたことによる。中等教育と高等教育ではその目標や方法、学習者の年齢や知識・能力などは異なる。そこで高等普通教育の一環として行われる大学の外国語教育には、これにふさわしい目標と内容、そしてそのための方法が必要である。本連載で述べてきたことは、今日の事態の改善に必要な現行制度変更の問題は措くとして、上のような脈絡の中で行われるドイツ語読解教育の方法に関する改善提案の一例である。

そこで本連載を終わるにあたって、あらためて〈戦略と戦術〉を拙稿の表題とした理由を出発点として、高等教育とその中で行われる外国語教育の目標と

意義、機能などについて歴史的教訓も参考とし、自ら考えるところを補足しておきたい。したがってこれは同時に筆者がどのような料簡でドイツ語教育、とりわけドイツ語読解教育の研究と実践にあたってきたかということでもある。本連載やそれ以前に書いた論文などとも一部重複することはご容赦いただきたい。

筆者が英語教員、あるいはチェコやフランスなどのドイツ語教員であれば、失礼ながらこうした問題についてあまり考えることはなかったであろう。しかし高等教育の枠組の中で、ドイツ語という日本では非日常的な言語の授業を、これを専門とするわけではない学生に対して担当する者としては、〈何のためにドイツ語を学ぶのか〉、〈なぜ理工学部や商学部でドイツ語なのか〉という問題について絶えず考えざるを得なかった。しかし僭越ながら、これはドイツ語のみならず、専門、非専門の別を問わず、およそ大学で授業を担当する者全員に向けられた問いであると考ええる。

## 1. なぜ〈戦略と戦術〉なのか

日常的に使用されることばの中で当該の文化・社会を理解する鍵となる語や概念がある。ドイツ語の場合、管見では Funktion（機能）、persönlich（個人的に）などと共に、〈Ziel（目標）・Mittel（手段）〉もこれに含まれる。その背後にあるのは、何かをしようとする時に、まず目標を定め、その実現にとって適切な手段を選択・利用するという考え方である。これは何かの企図・達成を図る（Operation）に際して有効な方法である。こうした思考はドイツのみならず、欧州に広く見られるのかもしれない。いずれにせよ、戦略（Strategie）と戦術（Taktik）という軍事用語は、日常的にこうした目標・手段の組合せという図式で人々が考え、生活し、行動する中から生まれたものであり、その逆ではないと考える。

一方日本ではこうした目的合理主義的思考は、少なくとも日常生活の中ではあまり一般的ではない。これに代わって日本で日常的に広くかつ根強くみられるのは、目標や手段といった区別をあまり意識することなく、「『アゲアゲのノリ』と『気合』」(斎藤 2014, p. 18) で目の前のことに体当たりに〈がんばって〉取り組み、目標の達成は成り行きにまかせるという姿勢である。斎藤環はこうした心性を「ヤンキー文化」(斎藤 2014, p. 18) と呼び、次のように述べている<sup>(2)</sup>。

ここまでヤンキーと古事記の関係にふれてきた以上、丸山眞男の言葉にも耳を傾けないわけにはいかない。それでは、丸山は何を言ったか。彼は古事記を徹底的に読み込んで、「つぎつぎになりゆくいきほひ」の歴史的オプティミズムが日本文化の古層にある、と喝破したのだ(「歴史意識の『古層』」『丸山眞男集 第十巻』岩波書店 参考5)。

何のこっちゃと、と思っただろうか。これは僕なりに「翻訳、するとこうなる。要するに「気合とアゲアゲのノリさえあれば、まあなんとかなるべ」というような話だ。これが日本文化のいちばん深い部分でずっと受け継がれてきているということ。つまり丸山というわが国でも屈指の政治思想家が、まだヤンキーという言葉もなかった戦後間もない時期に、日本文化とヤンキー文化の深い連関をみぬいていた、ということになる。(斎藤 2012, p. 227 太字原口)

〈ヤンキー文化〉の背後にあるのは、理や目標の達成よりも、行動の意気込みや取り組みに際しての熱意、美と情緒といった〈ロマンティシズム〉を尊重する「反知性主義的な行動主義」(斎藤 2014, p. 28) である。これは旧日本軍においても同様であった(戸部他, p. 335), (斎藤 2014, pp. 19-22)。軍隊は学校や刑務所、病院などと同様に、人間から成り立つ社会組織である。したがっ

てそれらのあり方や、軍隊であれば兵器の開発思想、戦争や作戦の計画・遂行の様相などは当該国の思考・文化の縮図である<sup>(3)</sup>。筆者はこうした〈軍事文化論〉の観点から見て、巨大な国家的事業（Operation）であった日中・太平洋戦争敗北のソフト面での最大の原因は、日本文化の〈ヤンキー性〉に集約されると考えている。もとより〈つぎつぎになりゆくいきほひ〉という世界観や〈ヤンキー性〉は文化人類学的、社会学的には一つの興味深い文化のあり方である。しかし戦争などで大きな現実的災いをもたらしたことを考えるならば、少なくともこれは相対化し、批判的に対処すべき問題である<sup>(4)</sup>。また熱意ややる気が全く無意味であるというわけではない。しかしそれは「目的と手段とは正しく適合していなければならない」（戸部他，p.269）という条件を満たしたうえでのことである。そして戦術的保証を欠いた戦略論は単なる作文あるいは放言，大言壮語に等しい。また一方で、戦術はそれ自体では意味を持たず、その収斂先である戦略を欠く場合、戦術の自己目的化という由々しき問題を生む。

目的と手段の不適合の悲惨な象徴が特攻機による艦船攻撃である<sup>(5)</sup>。特攻に使用した航空機材の性能と急速養成された搭乗員の技倆は低かった。これに対して、米軍の電探による嚴重な警戒と多数の直衛戦闘機，近接信管と電探射撃を用いた猛烈な対空砲火などを勘案すれば命中の可能性は非常に低い。また命中した場合でも、航空機と艦船の物理的特性から空母，戦艦など主力艦の撃沈は望むことができない。そのうえ、生還の可能性がないことから反復攻撃はできず、乏しい日本の航空機と搭乗員はさらにジリ貧に陥る<sup>(6)</sup>。軍人であればこそこうしたことは分かっていたはずである。それにもかかわらず特攻を敢行したのは、吉田松陰の「かくすれば かくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」ということなのであろうか。「勇ましい美文調の語句」（千早，p.200）を散りばめた「内容空疎の名調子」（斎藤2014，p.40）の作戦命令を作文する軍官僚にとっての美と情緒はそれで満たされようが、これに基づいて出撃させられる搭乗員はたまったものではない。〈必勝の信念〉では対空弾幕は突破で

きない。まさに「『鉄量を破るものは鉄量以外にない』」(堀, p. 35 傍点省略)のに対して、昨今の特攻隊賛美の言説は美と情緒の次元からのものである。これは上記したような冷厳な事実や巨大な犠牲を知っての上でのことであろうか。

目的と手段、そして戦略と戦術は戦争や企業経営などだけのものではない。外国語教育もまた言語運用能力形成という目標に向かって授業を行う〈事業(Operation)〉の一つである以上、その技術的側面においてはこうした考え方が必要であり、有効なはずである。テキストを読むことの目標は中身を理解することである。これに対して日本の読解授業において依然として支配的な、未知語を片端から辞書で引きながら各文を文法に基づいて順番に日本語訳してゆくという文法訳読法は、その方法として、そして読解力育成法として有効であろうか。読解力の形成には大量に読むことが必要である。これに対して文法訳読法においては辞書を引くことに時間と労力を取られ、授業で読む量はわずかとどまる。またその煩わしさは学習意欲にも否定的に作用するのみならず、ともすれば辞書を引いて日本語に訳すことが自己目的化し、読解本来の目標である内容理解が疎かとなる。確かに語彙や文法はテキスト理解にとって不可欠である。しかしこうした言語的知識はそれら単独では意味を持たない。必要なのはこれら为目标や他の手段と関連付けて協働させることである。そこで〈非言語的な知識や能力の活用によって、言語的知識への負荷を軽減する〉、〈部分から全体へのみならず全体から部分への理解を心がける〉、〈長文は短文に分解を図る〉、〈読もうとする分野に応じて習得すべき語彙を考える〉など、もう少し異なった形のテキスト攻略法が必要であり、また可能なのではないか。こうした一連の疑念が筆者の読解法の研究と実践の出発点である。そしてこれをまとめた本連載の表題を〈戦略と戦術〉としたのは、上記したような目標と手段の関係、そして日中・太平洋戦争の歴史的教訓なども参照し、読解と読解教育を一つの作戦行動(Operation)と見立て、テキスト理解という目標へ至る道筋や各種手段について整理・解説を試みようという意図からである。

## 2. 反面教師としての軍学校の教育

これまでに兵器に関する書籍や戦記などを読めば読むほど痛感したのは、日中・太平洋戦争が当時の日本の国力を考えた時、いかに身の丈に合わない無謀な行為であったかということである<sup>(7)</sup>。1941年のアメリカのGNPは実に日本の12.7倍である(森本1998, p.385)。そのうえ作戦至上主義のもと、物資、資源の内地還送や、前線部隊への補給についての備えもほとんどないまま、〈旺盛不屈ナル攻撃精神〉で戦線を野放図に拡大した結果が、日本軍戦没者の60%強が「戦地栄養失調症による広い意味での餓死者」(藤原, p.138)という惨状である<sup>(8)</sup>。まさに死屍累々である。そもそも戦争の開始にあたってその現実的な終わり方を考えていなかったことは、きわめて無責任であり、どこまで戦争を本気で考えていたのかさえも疑わしい。日本軍は戦争を道場での武道の試合のようなものを取り違えていたのではないかという印象を受ける。いずれにせよ日本と交戦国そして軍・民の別を問わず、〈戦いはやってみなければわからない〉という無謀な博打として始めた戦争(丹羽, pp.104-106)の犠牲となった方々は本当にお気の毒である。深く哀悼の意を表する。

一般に日本軍の兵器は連合軍と比較して質、量ともに劣っていた。そこでこれが原因なのか結果なのかは定かではないものの、旧軍では「三八式歩兵銃の宮本武蔵が出現しても不思議ではない」(山本七平2004, p.185)という「『術・芸』絶対化の世界」(山本七平2004, p.181)が支配的であった<sup>(9)</sup>。一方で設計としては優れた軍用機や発動機、火砲などが日本に全くなかったわけではない。しかしこれらも貧弱な生産力、粗悪な資材や工作力不足による稼働率の低さなどから十分に戦力化することができなかった。戦争はカタログ性能で行うものではない。〈設計は優れていた…〉というのは単なる負け惜しみにすぎない。

英・米などの駐在武官やその経験者からの報告、各種統計数値、ノモンハン事件の戦訓、総力戦研究所による研究結果<sup>(10)</sup>などを冷静に受け止め、日本が英・

米・ソ連などに比べて資源・国力で大きく劣り、軍隊の機械化が遅れ、火力不足であったことなどを謙虚に認識していれば<sup>(11)</sup>、そもそも戦争は避けるという選択があったはずである。しかしそれにもかかわらず戦争に突入したのは、これを行った人間の問題である。当時は軍が政治をも動かす力を有していたことを考えるならば、それは軍人とりわけ幹部軍人育成の誤りに帰着する。こうした関係で、30年ほど前に初めて読んだときから忘れられないのが次の一節である<sup>(12)</sup>。

連隊本部の生活は総じて索漠たるものであった。当時の私の慰めは、田中軍医大尉と話しあうことだけであった。彼も応召将校ではあるが、医学者らしく冷たい認識眼の持ち主でいながら教養もゆたかで心根に優しいところがあって、面談していても楽しかった。彼の言葉で今も忘れられないものが一つある。それは砂本連隊長にたいする批判であった。「連隊長は戦闘がはじまると手を叩いて喜ぶ奴だ。」こう言って彼は、軍人の愚劣さを嘆いていた。幼年学校から士官学校を経てきただけの職業軍人には、砂本連隊長のようなのはよくある例である。彼らの心意は、戦争ゴッコ以外には興味をもたないのだ。単純といえば単純、明快といえば明快である。だが、その単純は犯罪と直通するものなのだ。日本の陸軍士官学校は、そういう恐るべき単純型人間を大量に生産したのだ。田中大尉の反軍的心情は、そういう人間タイプに対するやりきれなさからきているようだった。その点では、私の陸士出将校に対する嫌悪感と同じであった。砂本連隊長は人柄にも一種の品格があって、平素は部下にも優しく、別に悪い人ではなかったのだが、田中大尉の話を聞いていると何かしら連隊長の二重人格的なものを感じずにはいられなかった。が、そうした分身的現象は砂本連隊長におけるだけのものだろうか。われわれはみな多かれ少なかれ二重人格的存在になりつつあるのではないのか。これが、そのときの私の心内の

怖れであった。(信太, pp. 66-67 太字原口)

この後に信太少尉たちの部隊は作戦に出動する。そしてある日次のような事態に陥る。

昼すぎてしばらくした頃、どこからか銃声がして、〔…〕こちらの先遣中隊からも軽機の音がしだした。私の直後にいた砂本連隊長は、『やってる』と声を発すると、私たちを急がせながら馬を駆った。〔…〕敵情偵察をおこなって部隊全体を掌握した後に進攻すべきであったのに、すっかり陽気になった連隊長は、そのまま勢いに乗って本部だけを連れて平地を秩序もなく突進していった。敵の陽動作戦に引っ掛かっていたのである。危険であった。(信太, pp. 71-72 太字原口)

信太少尉の判断のとおり、敵が堅陣を築いて待ち構えているところに誘い込まれ、激戦の中で多くの戦死者を出し、連隊長自身も重傷を負う。田中軍医大尉の見立ては正しかったのである。戦闘が始まると陽気になってもらっては困るのである。しかし今日のわれわれはこれがかつての軍人の愚行として笑えるであろうか。ここにある〈陸軍士官学校〉を〈大学〉、〈戦争ゴッコ〉を〈各自の専門〉と読み替えるならば、今日の日本もまた残念ながらこの問題と無関係ではない。この一節を読んで以来筆者は、〈日本の大学は、そういう恐るべき単純型人間を大量に生産〉しているのではないか、そして何よりも自らもまたその一翼を担っているのではないのかという疑念を拭い去ることができない。法務にしか関心のない法学部生、ビジネスにしか関心のない商学部生、科学や技術にしか関心のない理工学部生、文学にしか関心のない文学部生では困るのである。そして自分はどうかの。

もとより陸軍幼年学校、陸軍士官学校出身の将校の中にも註(12)に引用した



神保信彦中佐などのように良識と見識を備えた者がいなかったわけではない。しかしこうした〈恐るべき単純型人間〉の発生や跋扈を回避するためには、構造的問題として幼年学校や士官学校などの教育がどのようなものであったかを知っておく必要がある<sup>(13)</sup>。詳細は省略するとして、これらの軍学校の教育方針を要約すると、〈無駄〉を省いた〈実用教育〉とイデオロギーの注入を徹底して行い、ひたすらこれへの適応を追求させ、生徒に〈よそ見〉を許さず、定められた模範解答への近さを評価基準とし（戸部他，p. 331-332）、疑うことを知らず、枠と型にはまった〈学校秀才〉を純粹培養することであったといえよう。その弊害は上の田中軍医大尉の指摘するような軍人の思考の単純さと浅薄さ、そして視野の狭窄、想像力の欠如であり、多くの軍人は物事を狭義の〈軍事ゲーム〉の枠内でしか考えられず、戦術や戦略をより広い社会的脈絡の中に位置づけて対処することができなかつたことである。これはとりわけ軍のエリートとして政治や外交などとも関係する複合的思考と判断が求められる高級軍人にとって致命的欠陥である。一般によく指摘される〈日本の軍人は戦闘に勝つことと戦争に勝つことを取り違えていた〉という問題もこうした点に由来する<sup>(14)</sup>。

軍人は一つの専門職である。戸部は士官学校における教育方式の変更と軍人の専門職化について次のように述べている。

この新しいドイツ方式については、それまでの学科本位が術科本位に改められ、幅広い一般教育重視から軍事にかたよった技術教育に転換した、とする批判がある。その結果、一般常識に欠け一定の鑄型<sup>いがた</sup>にはめ込まれた画一的な将校が生み出された、とも指摘される。だが、後者の批判はともかく、ドイツ方式採用前の教育内容が一般教育重視であったかどうかは疑問である。〔…〕したがって、フランス方式からドイツ方式への切り替えが士官教育の画一化や将校の常識欠如をもたらしたわけではない。画一化や常識欠如は、フランス式やドイツ式とはあまり関係なく、むしろ専門職

化が促したと見るべきだろう。軍人の専門的職能を重視し、それを軍学校で身につけさせようとするれば、画一化や常識欠如は、いわば不可避免的に発生する弊害だったのである。そうした弊害の発生は、軍の近代化あるいは専門職化から派生した逆機能の一つでもあった。(戸部, pp.94-95)

画一化や常識欠如が専門職化に付随するとすれば、これは軍人のみならず、広く専門的職能を重視する今日のわれわれにとっても無関係ではない。そして専門職化の背景にある社会と職業生活は、人工知能やバイオ技術、情報化社会の進展などに象徴される科学と人間・社会、そして倫理・哲学に関わる諸問題によって複雑化し、混迷の度を増している。また人口減少の中で今後求められるのは、経済成長の時代とは逆に、経済規模縮小を前提として退却戦をいかに行うかであり、既存物の手直しや組み換え、互いの調整など多面的で深い配慮を要する地道な作業である。そこで必要とされるのが、所与の諸条件や前提などへの適応よりも、そこからむしろ一歩身を引き、多面的、複合的な観点から物事を相対化し、〈ゲームのルール〉自体などについて根本的に懐疑し、行動できる人間である。これには専門外も含めた多様な知識や経験と洞察、見識、そして哲学と倫理観が不可欠である。さらに近年の〈グローバル化〉や日本と世界の先行きが不透明であることを考えるならば、想定外の事態に対応できる能力もまた必要である。これらは従順に定型的知識を記憶する学校秀才が必ずしも得意とするところではない。池田は次のように指摘している。

戦闘は賭博にも似て、かならずしもこちらの計算どおり相手が動くものではない。計算外の事態が発生した場合、とっさの臨機応変の対応ができる人物は、模範解答づくりのうまい学校秀才からは生まれにくい。(池田, p.172)

### 3. 大学教育における複合性と自由

以上のような歴史的教訓や今日の事情も踏まえるならば、大学の学部教育に求められるのは、早くから各専門に凝り固まるのではなく、学生にさまざまな〈わき見〉や〈回り道〉などの経験もさせつつ、多様な知識・能力と状況対応力を備えた人間を育成することである。そこで職業上の前進を目標とする専門科目をアクセルとすれば、非専門科目はブレーキにも例えられよう。前方だけ見てアクセルを踏み込んで走るのは楽で、爽快である。しかし砂本連隊長の行動同様に危険であることは言うまでもない。人が社会という公道上で、自他の安全と共存を図りつつ目標に到達するためには、アクセルと共に、常に周囲に目を配り、必要に応じて自らを制御・抑止するためのブレーキが不可欠である。そのために必要なのは、狭い専門領域に特化してこれを推進する〈単一栽培 (monoculture)〉<sup>(15)</sup>の逆、すなわち専門化に対する〈平衡おもり (counterbalance)〉として、非専門科目も取り混ぜた混植栽培的な教育であり、これらの間に個別的知識をつなぐコト的な意味的連関を作り出すことである。教育内容におけるこうした間口の広さとその深化の関係は、関口が指摘するとおりである。話はすべてつながっているのである。

人世の事というものは、何が何とどう関係しているか、そう簡単には云えません。凡ての部門が凡ての部門と凡ての関係に立っている。深く一事に徹底せんがためには、深く一事に徹底してはならないのです。すべての範囲を抱擁せんがためには、凡ての範囲を抱擁してはならないのです。幅を広く取らんがためには、まづ一ヶ所を深く穿つことが必要です。一ヶ所を深く穿たんがためには、できるだけ幅を取ることが必要です。如何となれば、幅は幅に非ずして、奥行き的一种だからです。奥行きも亦実は奥行きに非ずして、単に幅の一種にすぎないからです。如何となれば、問題は

面積の大を狙うにあるのですから、幅と奥行には、別に幅としての絶対価値、奥行としての絶対価値というものはない筈です。／まるで禅坊主の寝言みたいな事になつてしまいました。単なる一語学者としての私の、此の『半生観』は、おそらくは脳力を資本にして仕事をする有らゆる専門に共通な修身ではないかと思ひます。(関口, p. 350 太字原口)

何が幅で、何が奥行きかは二次的問題であり、重要なのは〈面積の大〉という両者の相互作用が生み出す効果である。大学教育はこのような複合性による勉学の促進効果に自覚的でなければならない。本連載でも述べてきたように、言語の運用は語彙や文法といった狭義の言語的知識・能力のみによって行われているわけではない。同時に必要なのが一般常識や判断力、内容的知識といったそれ以外の多様な非言語的な知識や能力であり、これらの相互作用の中で言語の運用ははじめて成立する。筆者が担当する〈ドイツ語読解法〉の履修者の多数は3年次生である。したがってほとんどが大学でドイツ語を学び始めた彼らの授業時間数は、3年進級時で180時間程度(90分×週2回×15週×4学期)である。したがって正直なところ、彼らのドイツ語の語彙は少なく、文法もまだ十分に定着しているとはいえない。それにもかかわらず筆者の経験では、個人差はあるにせよ、これに分野固有語彙や内容的知識などを少し追加し、辞書の助けも借りれば、彼らは本連載の(5)、(6)に採用したような一般ドイツ人向けの人口問題や食糧問題に関する新聞記事などをかなり理解することができる。これは立派である。これが可能であるのは、彼らが英語の学習経験をはじめとしてドイツ語以外の各種の知識・能力も身に付けており、これを内容理解に活用できるからである。これは幅も奥行きも狭い中学生には無理な芸当である。こうした点で筆者は彼らの小学校から高校まで、そして大学の専門・非専門の授業担当教員諸氏に深く感謝する。これがあって筆者の授業も始めて成立するのである。ドイツ語の能力はドイツ語のみによって支えられているのでは

ない。このことは専門科目の場合についても該当するであろう。

日本の中等教育は校則や受験の圧力などもあって全般に窮屈である。これに対して大学はまだ比較的自由であり、勉学以外にも〈半社会人〉としてアルバイトや海外旅行、留学などの経験も積むことができ、これらもまた幅広い視野と能力の育成に貢献する。「戦闘がはじまると手を叩いて喜ぶ」ような心性の防止に不可欠であるのは、こうした「ある種の〈隙間〉」(室井, p. 114)を許容する環境やその中での勉学、文学や歴史書をはじめとする読書による代理経験などから生まれる懐疑や自己相対化である。まさに『『ノイズこそが知を生み出す』』(室井, p. 115 太字原口)のであり、大学はこうした面からも、混植の畑でなければならない。これが失われるとき、社会もまた窒息死することは、ナチスドイツなど〈夾雑物〉を排除した社会がみな自滅した歴史に見て取ることができる。長くなるが、重要な点なので室井の指摘を引用する。

### 隙間としての大学の崩壊

ところで、このシンポジウムで吉岡洋氏が「隙間」とか「空き地」という言い方、また内田樹氏が「ノイズ」という言い方をしているが、要するに両氏がいたいことは、教員と学生がとものつくり上げる自由な学びの〈場〉としての大学が崩壊しつつあるというようなことであると思う。

私は大学とは、二〇歳前後のこれからの社会を担う若い世代が四年間(あるいはそれ以上の期間)をすごすきわめて貴重な学びの〈場〉であると思っている。もちろん、小学校・中学校などの初等・中等教育も、思春期の時期を過ごす高校も大切なのであるが、それまで学習指導要領等によって文科省が決めた科目と単元を、ひたすら印刷機でプレスされるように頭の中に刷り込まれ、つめこまれてきた「生徒」たちが、初めて自分の意志で世界を解釈し、生き方を模索し、学ぶことを選ぶ(もしくは不幸にして何も学ばないことを決める)場所が大学ではないかと思うのだ。

その意味で大学とは、これまでの閉ざされた環境の中で、限られた数の大人たち、同級生や上級生、下級生、テレビやインターネットなどのメディアを通して形成されてきた狭い世界のイメージをぶち壊し、これまで出会ったことのなかったような「変な大人たち」、自分の知らない世界を知っている友達、そしてこれまでそんな考え方があるとは知らなかった文学・芸術作品や哲学、文化理論、自然科学や社会科学を含めての学問にできるだけたくさん出会える場所ではなくてはならないと思う。したがって、そこには自分がそれまで信じ込んできたような固定的な世界観をリセットさせ、世界を解釈するための遠近法が壊れるような経験が含まれていなければならない。

決められた職業選択のために有利になるようなカリキュラムをひたすら修めて、その狭い目的のために必要なスキルだけを身につけるのだとしたら、それは立派な調理師になるための料理の専門学校と何ら変わらない（まあ、美容師になるためとか、教員になるためだけとかというのが「専門職大学院」なのだけだ）。

だから文科省の行っている大学改革が「グローバル社会の中で活躍できるビジネスマン」や「地域社会の問題解決ができる社会人」や「世界水準での高い研究成果を出すことのできる研究者」といった決まりきった目的に奉仕する「人材」（「材料」としての「人間」= human material という英語でもあまり日常では使わない言葉を文科省は好んで使いたがる）を育成するというだけだったら、そもそも大学などは要らないのだ。すべてを職業専門学校にすればいいのである。どうせなら「グローバル人材専門学校」や「国立公務員養成所」とかにしてしまえばいいのではないだろうか。

教養教育やリベラルアーツ教育が大切だというのは、それらの一つ一つの科目が、その人が普通に考えてきた人生を生き抜くのに役に立つとか、豊かにするからではない。そうではなくて、さまざまな考え方を学ぶ

ことで、自分がそれまで自由に考えてはいなかったこと、さまざまなイデオロギーや因襲に縛られていたということに対する「自覚」や「気づき」を与えてくれるから大切なのである。

その意味で、大学は「隙間」を作らなくてはならないし、「ノイズ」を提供しなくてはならないのではないだろうか。

〔…〕こんなシステムから外れた空間をシステムの中に明示的に作り上げることはできないのだが、そういう余地を残しておかなければ大学は死滅するといっているように思われる。吉岡氏はただ単に国が押しつけた政策やプログラムに服従するだけの、自分の頭で何も考えないような「人材育成」だけを重視する大学改革に反対しているのである。

文科省による一連の大学改革に一貫して欠けているのは、このような教員と学生との知的共同体の〈場〉としての大学なのではないだろうか？「大学を出てから役に立つ知識やスキルを提供するサービス業」というような考え方では、大学の〈場〉としての豊かさは崩壊してしまう。「役に立つ」授業を提供すればいい、「役に立たない」授業はできるだけ廃止して、適当に教養科目を配置しておけばいいというような上からの管理運営しか考えない立場からの大学改革は大学の可能性を破壊してしまうように思うのだ。(室井, pp. 119-123 太字原口)

4. で引用するように、戦時中に海軍兵学校校長の井上成美は海軍当局からの即戦力教育の要求に対して、室井の〈それなら大学は廃止し、すべてを職業専門学校にしまえ〉と同趣旨の発言をしている。痛烈な敗戦を体験し、75年ほどの時を経てもなお、文科省の浅薄で貧困な教育観は海軍当局と何ら変わっていない。そしてこうして即戦力教育を受けた〈人材 = human material〉が文字通りの消耗品として無残に使い捨てられたことは、特攻隊に関して上で述べたとおりである。

#### 4. 高等普通教育と文学・人文知の必要性

陸軍は昭和15年秋に士官学校の生徒採用試験科目から英語を除外した（阿川, p. 334）。これによって成績優秀な中学生の陸士志望が増えていることへの対抗上<sup>(16)</sup>、海軍は兵学校に対して生徒採用試験での英語の廃止を勧告した（阿川, p. 334）<sup>(17)</sup>。これに対して校長の井上成美は「『一体何処の国の海軍に、自国語一つしか話せないやうな兵科将校があるか。〔…〕秀才が陸軍へ流れるといふなら、流れて構はない。外国語一つ真剣にマスターする気の無いやうな少年は、海軍の方でこれを必要としない〔…〕』」（阿川, p. 335）としてこれを拒否し、英語の授業時間も維持させた（宮野, p. 214）。戦況悪化の中で即戦力教育を求める海軍とは反対に、当時すでに日本の敗戦を予期していた井上は（阿川, pp. 355-356）次のように考えていた<sup>(18)</sup>。

要約すれば、自分が目ざしたのは兵隊作りではない、生徒をまづジェントルマンに育て上げようとしたのだといふことであつた。ジェントルマンの教養と自恃の精神を身につけた人間なら、戦場へ出て戦士としても必ず立派な働きをする。だから基礎教養に不可欠な普通学の時間を削減してはいかん。減らすなら軍事学の方を減らせ。英語の廃止なぞ絶対認めない。江田島伝統の教育目標は、二十年三十年の将来、大木に成長すべき人材のポテンシャルを持たしむるに在つて、目先の実務に使ふ丁稚を養成するのではない。戦争へ行つて今すぐ役に立つ人間ばかり欲しいなら、海軍砲術学校、海軍水雷学校、海軍潜水学校等所謂術科学学校だけ残して、兵学校そのものは廃止すべきである。俗耳に入り易い似非愛<sup>えせ</sup>国者どもの言に惑はされて、本来の道を見誤つてはならない。教室でいくさの話はするな。生徒をもっと遊ばせろ。彼らの生活に笑ひとゆとりと、のびのびしたりズムを与へてやれ一。（阿川, p. 355 太字原口）



「生徒をもっと遊ばせろ」という意見は、上の室井の意見とも符合して興味深く、示唆に富んでいる。「俗耳に入り易い似非愛国者どもの言」は残念ながら今日も随所に健在である。井上はさらに次のように述べている<sup>(19)</sup>。長くなるがこれも重要な点なのであえて引用する。

英語ばかりではなく普通学第一主義もそれ（敗戦による海軍消滅時への備え 原口）です。兵学なんかは、軍艦に乗ってから自分の配置で、自分のやることだけをおぼえればよい。軍事学なんか、やりたかったら卒業してから、いくらでも勉強する機会はあるんだ。少尉や中尉で軍事学の理論をやり、少少の实地訓練をやって出したって、同じ軍艦というものは二つとないくらいなんだから、そこへ行っておぼえればいい。むしろ、兵器を理解するだけの頭が必要だ。結局メカニクスの知識だということで、メカニクをよく教えろといたしました。（井上, p.132 太字原口）

そりゃ将校だって鉄砲の撃ち方も知らん、ポートも漕げないじゃ困るから、モーターランチぐらいは操縦できるようにし、ピストルぐらい撃てるように訓練する。あとは体をきたえて、精神をしっかりとっておけば、もう一般教養を身につけて戦場へ出す。それで十分に将校としてつとまるだろう。戦争に勝つ負けるにかかわらず立派にやっているとこの考えだった。（井上, p.132）

それにさっきもいったけど、学士さんなら戦争はできる。戦後になっていろんなものを見ると、学士さんで召集され戦場に行ったものは、みな立派に働いていますね。あのとおりですよ、ゼントルマンなら、戦争はできます。立派なものですよ。自分の予想をああいいう人たちが証明してくれた

と**思**つて、あの人たちには頭を下げておりますよ、ほんとうに。(井上, p.132 太字原口)

ジェントルマンが持っているデューティとかレスポンスィビリティ、つまり、義務感や責任感……戦いにおいて大切なのはこれですね。／その上、士官としてもう一つ大切なものは教養です。艦の操縦や大砲の射撃が上手だということも大切ですが、せんじつめれば、そういう仕事は下士官のする役割です。そういう下士官を指導するためには教養が大切で、広い教養があるかないか、それが専門的な技術を持つ下士官と違ったところだと私は思っております。ですから、海軍兵学校は軍人の学校ではありませんが、私は高等普通学を重視しました。(井上成美伝記刊行会, p.365 太字原口)

当時の陸・海軍と今日の文科省は即戦力養成教育を求めるという点で相似形である<sup>20)</sup>。これに対して、〈戦場〉を〈社会〉、〈兵学校〉を〈大学〉、〈術科学校〉を〈専門学校〉、〈軍艦〉を〈企業〉、〈兵器〉を〈仕事〉などと読み替えれば、上の井上の考えは今日にも通用する。高等教育の目標は各科目の枠内での単なる知識の集積ではなく、物事を批判的に解釈し、自らの見識や意見を形成することにある。したがってそのために必要なのは、〈幼稚教育〉ではなく、学生のアタマを鍛え、見識を高めることである。これも井上のことばを借りれば「『物ヲ知ッテ居ル』ヨリハ『物ノ理解出来ル様』」(井上成美伝記刊行会, p. 資-216 太字原口)にすることである。

入学困難大学の入学者には初等・中等教育の覇者である偏差値秀才が多くを占める。そして彼らは現実の問題として社会の指導的立場に立つことが少ない。そこでこうした大学には、彼らが入学歴社会の〈勝ち組〉として自足・慢心し、ほぼ高偏差値高卒者の意識と学力のままでは卒業できないようにする

自覚と責任、そして教育の具体的方策が求められる。

さらに言えば、今日の社会的指導層が〈人材難〉である一因は、日本が総合的・絶対的な学力や知力を評価する社会ではなく、学校は〈教科〉を学ぶ場と見なされ、これに基づく偏差値という相対性による入学歴社会であり、本人も社会もこの点に自覚的ではないことである。そしてこれと共犯関係にあるのが、社会構造が変化し、政治家などには高度な専門的能力や筋道だったことが求められるのに対して、理よりも気合や情緒などに流れる日本の社会的風土や、5.で述べるようにことばの軽視は相変わらずであるという事情である。

即戦力的な〈実用〉教育は、状況や配置が変われば使い物にならなくなる。これに対して、高等普通教育の内容は普遍的であり、時間と空間を超越した大きな汎用性を秘めている。したがってグローバル化やIT技術の進展などで環境の変化が早ければこそ必要なのは、むしろ逆にこうした普遍性に基づいてその時々々の状況への対応を可能にする高等普通教育的素養である。また科学や技術などの進展に対する技術的適応力の前に必要なのは、人はこれからどう生き、どのような社会を目指すのかという哲学と倫理である。本稿の冒頭でも触れたように、こうした教育は歴史的、制度的には、戦前は旧制高校や大学予科、戦後の新制大学では教養部や教養課程が主に担ってきた一方、1991年の「大学設置基準の大綱化」以来その場が消失しつつある。しかしこれは中等教育と専門教育の間で両者をつなぎ、自立して考え、学ぶことができる良き社会人育成のためにどこかで、何らかの形で行わなければならない教育課程である<sup>(21)</sup>。

技術や社会制度などの価値や意義は使い手である人間によって左右される。人間は無色透明な中立的存在ではなく、また合理性や善意だけで生きているわけではない。このことはダイナマイトや飛行機、原子力、コンピュータ技術などが大きな利便をもたらすと同時に凶器とも化し、多くの問題や悲惨もまた生んできたことを見れば明らかである。これはひとえにこれらを使用する人間の側の問題であり、自らの投影である。また〈理論的に正しい〉軍事作戦や企業

経営などが、常に成功するとは限らず、失敗することがあるのも、これを行う人間の欲や怯懦、迷い、その時の気分といった計算不能な要素が判断などに影響することが不可避だからである。人間は一方で合理性を追求すると同時に、非合理性もまた併せ持ち、天使と悪魔、理性と狂気、創造と破壊、賢明と愚かさなどが同居するという矛盾をはらんだ存在である。科学や学問、芸術などで大きな〈成果〉を挙げたドイツが、他方で〈能率的でコスパの良い〉人の殺し方を追求し、ガス室による大量殺人というグロテスクな蛮行を行ったことはその一例である。そしてこれはかつてのドイツ人だけではなく、われわれ人類全体が逃れることのできない問題である。

これに対して、こうした一筋縄ではゆかない気まぐれで不条理な人間という不可解な生き物を古来から見つめ、その内面を描いてきたのは文学である。したがって文学、そしてまたそれぞれの観点から人間とは何かを問い続けてきた哲学、歴史学、文化人類学といった人文知は、ともすれば一方的に合理性追求に走りがちな現代に生きるわれわれにとっての解毒剤として必須の素養であり、高等普通教育に不可欠の柱である。夏目漱石やシェイクスピア、ドストエフスキーなどの作品が今も読みつがれ、そこからいろいろな重要な示唆が得られるのは、社会的環境は変わっても、人間と人間のすることは本質的に変わっていないからであり、そこに描かれている内容は時間と空間を超えて今日のわれわれの問題とも通底するからである。しばしば誤解されるように、文学とは話の展開を楽しむだけの娯楽ではなく、人間世界における普遍性の描写である。

これに対して、かつての幼年学校や士官学校では小説は読むことができなかった（西浦, pp. 15-16）。このことは、軍は人間というものを知らうとしなかったことを象徴している。日本の軍人の単純かつ浅薄な思考と想像力の欠如、そしてそこから派生する独善的で硬直した作戦・攻撃至上主義や形式主義、員数主義などといった軍の構造的欠陥と失敗の根底にあるのは、人間という要素の排除である。軍学校の目的は近代的軍隊の幹部養成であった。これと同様に帝

国大学は国の近代化を目的として法律、工学、農学などの教育のために設立され、このことがその後の日本の高等教育の実学指向的性格を方向付けていることは周知のとおりである。しかしそれでも旧制時代には大学入学以前に高等学校、大学予科などで大学と同じ3年間、人文・社会・自然科学などについて学ぶ機会があった。これが新制大学では2年間の〈教養課程〉に圧縮され、1991年の〈大綱化〉以降は教養部も次々と廃止された。これは人間や人文知について学ぶ機会の減少という点で大学の〈術科学学校化〉であるとも言えよう。

法務、商品開発、医療等々、何をともってこれを担うのは人間であり、「特に社会問題が、もっぱら人間の精神に起因する」(荒川, p.142) ことも考えるならば、まさに「文学は実学である」(荒川, p.142) と言えるのである。これとは逆に、政治にせよ、経済にせよ、その担い手である人間という要素を無視するとき、いわゆる実学は虚学と化するのである。

## 5. 外国語教育の意義と機能

人間を動物から区別し、人間存在の根底にあるのは言語能力である。そして文学を生み出すのもまた言語である。このことを考えれば、高等普通教育において、母語をはじめとする言語教育もまたその重要な柱である。しかし日本社会の〈ヤンキー性〉には〈理屈を言うな、体を動かせ〉といったことばに象徴されるような「言語を根本的に受け付けない性質。」(斎藤 2014, p.149) が強く見られる。山本七平は軍隊と日本人捕虜収容所での経験から、ことばについて次のように指摘している。

一言でいえば、人間の秩序とは言葉の秩序、言葉による秩序である。陸海を問わず全日本軍の最も大きな特徴、そして人が余り指摘していない特徴は「言葉を奪った」ことである。日本軍が同胞におかした罪悪のうちの

最も大きなものはこれであり、これがあらゆる諸悪の根源であったと私は思う。／〔…〕他人の言葉を奪えば自らの言葉を失う。従って出てくるのは、八紘一字とか大東亜共栄圏とかいった、「吠え声」に等しい意味不明のスローガンだけである。〔…〕軍部のスローガンも、実はだれにもその意味内容がわからなかった。一体その言葉でどういう秩序を立てて、その中に自らが住みかつ人びとを住まわすつもりなのか、言ってる本人ですらわからない。(山本七平 1987, pp. 303-304 太字原口)

こうした歴史的教訓にもかかわらず、ことばに代わって近年増殖しているのが「情感を盛り上げ、気合をもたらし、自らの正当性を信じさせてくれ」(斎藤 2014, p. 38), 「知識や論理とは無関係に、依拠すべき肯定的感情をもたらししてくれる」(斎藤 2014, p. 38)「ポエム」(斎藤 2014, p. 38)である。斎藤流に言えば、山本七平の「八紘一字とか大東亜共栄圏とかいった、『吠え声』に等しい意味不明のスローガン」、作戦命令などの中の「勇ましい美文調の語句」(千早, p. 200), そして今日では「美しい国, 日本」, 「一億総活躍社会」などもポエム, 筆者のことばで云えば〈呪文〉である。これに対して国内では価値規範の多様化, 共同体の崩壊に伴う個人のアトム化, 社会の複雑化と利害関係の錯綜などによって, 日本人同士が日本語で互いに意思相通を積極的に図る必要性が増えている。また諸外国に対しては「アゲアゲの体当たり至上主義」(斎藤 2012, p. 128) やポエムは通用せず, 理とことばによる明確な意志疎通が求められる。これらへの現実的対応という点からもまた高等教育には母語をはじめとして, 内実あることばの使用のための言語教育が不可欠である。

英語ノミナラズ外国語ヲ解スルカヲ有スルコトハ感覚ヲツ余分ニ所有スル丈ノ利アリ。少クトモ肉眼ニ加フルニ望遠鏡ナリ顕微鏡ナリヲ以テスル丈ノ利アルヲ信ズ。(井上成美伝記刊行会, p. 資-190 太字原口)

言語にはそれぞれの世界観があり、これを通して見ることによって、世界は異なる姿をとって立ち現われる。また新聞・雑誌記事やニュースなどは当該の国、文化圏の視座や現実的利害などから書かれ、報道される。こうしたことを知り、他者は自分とは違った形で世界を見ているであろうという想像力を身に付けることは、国際的な活動にとって必須の前提である。また文学はことばで一つの言語宇宙を構成する。したがって外国文学を読むことは、上記したような文学の意義と合せて、母語では自明性のもとにともすれば見過ごされがちなことばの組み立てや使用、ことばへの接し方などを意識化させるという点でも有益である。一方母語と外国語はことばの使用という点では通底している。そこで外国語教育は多くの学生にとっての母語である日本語を意識化させ、その取扱いに対する注意を喚起することにもつながる。したがって母語に加えて外国語ができることは、知識や情報量を増やし、これによって日本語経由による情報が相対化できるのみならず、井上の言うように〈感覚ヲーツ余分ニ所有〉することであり、〈望遠鏡ナリ顕微鏡〉を使って世界とことばをより広く深く理解することに大きく貢献する。そしてこうして得た知識の間に意味的連関をつくり出し、認識や見識を増進することこそが、外国語運用能力形成の目標であり、読解法のような技能学習はそのための手段にすぎない。

外国語の選択という点に関しても歴史的教訓となるのが、陸軍における外国語教育の事情である。陸軍が範をとったのは欧州の大陸諸国である。そこで陸軍の高級幹部の多くが学んだ幼年学校では1937年まで英語教育を行わず（江利川, p.145）、生徒は独・仏・露語のいずれかを学んで士官学校に進んだ。これに対して英語と中国語を学ぶのは陸軍内で傍流であった一般中学からの士官学校入学者に限られていた（戸部, p.95）。そこで陸軍幹部の知識と関心はとりわけドイツ、そしてフランスとロシアに集中し、英・米の事情については疎く、このことが英・米の力を過小評価し、道を誤る一因でもあった（加登川,

p. 138), (江利川 pp. 178-191)。

一方今日の日本においてはこれとは逆に、外国からの情報の多くは英・米圏からのものであり、国民の外国語能力と関心もまた英語と英語圏に集中している。しかしもとより陸軍と今日のいずれの状態も好ましいものではない。また世界で広く用いられる英語は、これを使う非母語話者にとっては、イギリスなどの固有の言語というよりも「言葉ハ人種同士ノ符牒ニシテ規約ナリ」(井上成美伝記刊行会, p. 資-190), そして今日ではさらに進んで、自転車に乗れる、車の運転ができる、コンピュータが使えるといった一種の生活技術化しているといえよう。そこでかつての陸軍にとって英語が必要であったように、今日求められるのは英語に対する〈平衡おもり〉としても機能する英語以外の外国語の運用能力と当該文化圏に対する知識である<sup>22)</sup>。日本対英・米という二極構図はともすれば、あれかこれかという綱引きをまねきがちである。そこでこの対立構造にもう一つの比較対照の柱を立てることは、知識の偏りを防止し、三者による互いの相対化によって知識構造を安定させるという点でも必須の要件である<sup>23)</sup>。

こうした外国語教育の実施に際して、井上の次のような姿勢と具体的な方法は優れた現実的対処法である。

言葉ハ人種同士ノ符牒ニシテ規約ナリ。其ノ使ヒ方ヲ知り之ニ習熟スルコトガ其ノ技術ヲ習得スル所以ナルモ本校教程ハ時数少ク之ヲ望ミ得ザルガ如シ。然シ英語ニ対スル「センス」ハ充分ニ之ヲ育成シテ卒業セシムル必要アリ, […]。(井上成美伝記刊行会, p. 資-190 太字原口)

兵学校と同様、大学でも外国語教育に使用できる時間は限られている。したがってその枠内で外国語の運用能力を完成させることは不可能である。これは外国語のみならず、専門科目も含めて大学教育の方法と内容を考える上での大



前提である。そして外国語習得に最良の場所は教室ではなく、使用の現場である。そこで教室内での外国語授業に必要なのは、完成させることよりも、学生の一生を視野に入れて使用の現場での学習に資する仕込みないしは播種を図ることである。井上はその具体的方法として、文法を基礎とする、訳読を避け直読直解を心がける、常用語の反復活用、word family を集めさせて語変化に対する「センス」を養う（井上成美伝記刊行会、p. 資-190）などを挙げている。いずれも理に適った方法である。これに一つ付け加えたいのは、自立的な学習に備えて、外国語学、外国語教育学などに裏付けられた外国語の学び方を積極的に示すことである。一例としてドイツ語の語彙学習であれば、記憶と想起のために英語語彙や造語法を関連させる、語彙は漫然と数を増やすのではなく、2000語程度の基本語彙とともに専門語彙を優先的に習得する、論理構成の把握や先の展開の予測に有用な接続詞、副詞もまた優先的に習得するなどといったことである。これらを限られた時間で指導するためには、教員は当該言語が運用できるだけでは不十分であり、言語の学習と指導に関する方法を客体化して身に付けていなければならない。そして外国語教育に限らず、広く授業全般の舵取りの羅針盤として求められるのが、目標達成に対する手段という考え方であり、常に両者の適合を問うことである。

酒や味噌などの製造には仕込みと時間が必要である。まさに「『[...] 中央でどんなに米が入用か知りませんが、青田を刈ったって米はとれません』」（井上成美伝記刊行会、p. 資243）ということである。仕込みを怠ることは生産の放棄であり、未来の否定である。

## 6. おわりに

〈グローバル化〉を背景として、「『20年後、30年後の早稲田大学』、『世界ラ

ンキングにおける早稲田大学の位置』を考えなければならない」といった意見を耳にする機会が多い。もとより本学が潰れては何も始まらない。しかし何よりも重要なのは早稲田大学という組織体の勝利や番付などよりも、20年後、30年後の学生、教職員一人一人の幸せである。

もとより、ある程度の競争は必要である。しかしそれはあくまでも手段であり、目的化すべきものではない。そして何よりも問題であるのは、競争とは本質的に椅子取りゲームにほかならないことである。すなわち競争は、注目と賞賛を浴びる少数の〈成功者〉、〈勝ち組〉の背後で、それに数倍、数十倍する〈敗残者〉を構造的に生みだすことを忘れてはならない。すなわち彼らは〈人為的に作り出された敗者〉であり、そこで味わう挫折感や劣等感などは本来故なきものである。

そこでこれから社会に出る学生諸君には、一握りの勝者を目指してやみくもに競争に飛び込むのではなく、一人でも多くが自らの特性や身の丈に合った居場所を見つけ、それぞれに幸せな人生を送ってほしいと考える。もとより職業や仕事は重要である。しかし良き人生は、それらの成功のみによって保障されるものではない。要は職業人、企業人としてのみならず、一個人としてどのように生きるかである。

幸いにして本学の学生諸君の多くは恵まれた資質や生育環境などを有している。しかし世の中にはそうではなく、競争どころか人生の最低限のスタートラインにつくことさえ困難な人も少なくない。そしてそれはまた往々にして本人の責任に帰することができない理由によるものである<sup>24)</sup>。何らかの事情で、自分自身がそうした境遇にあったかもしれないことにも想像力を働かせる必要がある。豊かな知力や能力などは自ら作り上げたものであると同時に、自分では如何ともし難い所から与えられたものでもある。したがってこれらは自分のためのみならず、そうではない人たちのためにも使うべきものである。このことは良きものを与えられてこの世に生を受けた者にとっての義務である。

こうした観点からもまた、若い諸君に必要なのは所与の条件への一方的適応だけではなく、ゲームのルールそれ自体をも問う懐疑と相対化、そして内省し共感する能力である。大学はこれを身に付ける所である<sup>(25)</sup>。

かつてBBCのドキュメンタリー番組で見たポーランドのノバフタ製鉄所についての一場面が強く記憶に残っている。近代化・工業化の突破口として建設された製鉄所に、地縁、血縁から切り離されて若い労働者が集められる。最初は意気盛んであった彼らの中に次第に失望と退廃が広がる。ある労働者は言う：ここでは鉄の作り方は教えてくれるが、どう生きるべきかは教えてくれない。

最後に、これまで筆者による試行錯誤の授業につき合ってくれ、多くの示唆と刺激を与えてくれた歴代の学生諸君、研究・教育活動の後方支援にあたってくださった職員諸氏、多くの知的刺激と手助けを賜った同僚諸氏、そしてこれまで拙稿をお読みくださった方々に深く感謝する。

## 7. 註

- (1) ギムナージウムとはドイツの複線型教育制度の中で、〈大学入学資格試験（アビトゥーア Abitur）の合格を目標とする、日本式に言えばいわば中・高一貫教育校である。
- (2) 引用文中の「なりゆくいきほひ」は、まさに日本語が「〈なる〉的な言語（BECOME-language）」である（池上, p. 283）ことの象徴である。
- (3) この点について保阪正康も「戦争の内実にはなべてそれぞれの国の歴史や伝統、文化、道徳規範が反映する」（保阪 2005, p. 241）と指摘している。
- (4) 筆者は戦前から今日に至る歴史の流れは次のようなものと見ている。

仲間内で国際社会への不満を愚痴っているうちに、同調圧力もあって強気の意見が主流となり、雰囲気酔って〈盛り上がり〉、その勢いで英・米に突撃したところ、一面の焼け野原と原爆二発という冷水を頭から浴びせられ、その後はシェンとしてアメリカに尻尾を振っていたものの、最近また性懲りもなく〈日本スゴイ論〉や歴史修正主義に見られるような夜郎自大的誇大妄想というビョーキが再び〈盛り上がり〉きた。

- (5) 特攻については保阪（2005<sup>(2)</sup>）参照。
- (6) 特攻を拒否し、最後まで正攻法をとり続けた部隊については渡辺を参照。

- (7) 森本 (1998, 2002) 参照。
- (8) 日本軍将兵の直面した過酷凄惨な戦争と軍隊の実相については吉田を参照。米艦隊との洋上決戦のみを目標としていた日本海軍による海上輸送と船団護衛の軽視と無策については大井, 高橋, NHK取材班編を参照。
- (9) これは旧軍のみならず, 今日的一般社会にも広くかつ根強く見られる現象である。その良い面は日本の工芸品や工業製品などの高い水準や品質などに見られる。しかし一方で, これは勝負の土俵それ自体のあり方を問題化しようとせず, 所与の条件下での果てしなき適応競争とこれに由来する人々の精神的緊張や疲弊, 故なき負け組, 〈自己責任論〉などを生むという点で問題もまた多い。山本七平は次のように指摘している。

われわれは, 非常に長い間, この一定制約下に「術」乃至は「芸」を争って優劣をきめるといふ世界に生きてきた。この伝統はいまの受験戦争にもそのまま現われており, ちっとやそっとで消えそうもない。／＼してこの「術・芸」絶対化の世界に生きてみると, この「術・芸」が, それを成り立たせている外部的制約が変わっても, 同様の絶対性を發揮しうろかの如き錯覚を, 人びとに抱かすのである。(山本七平 2004, p.181 太字原口)

- (10) 1941年夏に到達した結論は次のようなものであったとされている。これは現実の推移にほぼ合致している。

十二月中旬, 奇襲作戦を敢行し, 成功しても緒戦の勝利は見込まれるが, しかし, 物量において劣勢な日本の勝機はない。戦争は長期戦になり, 結局ソ連参戦を迎え, 日本は敗れる。だから日米開戦はなんとしてでも避けねばならない。(瀬瀨, p.83)

- (11) また開戦後も含めて, 相応の地位にある軍人からも軍の問題点は指摘されていた。連合艦隊参謀も務めた千早は, 日本海軍の艦隊防空や無照射撃の問題点を実証的に研究・指摘し(千早, pp.17-22), 大本営情報参謀の堀は現地での地道な聞き取り調査から台湾沖航空戦の〈大戦果〉が全くの事実誤認であることを突き止めてその旨を上申した(堀, pp.159-173)。小沼治夫は参謀本部戦史課員として精神主義や肉弾突撃に異を唱え, 陸大教官として加わった「ノモンハン事件研究委員会」では同事件の「戦略・戦術」の分析を担当し, 火力や機動力の不足など日本軍の弱点を指摘している(鈴木, pp.82-123)。しかしこうした意見は威勢がよく強気の意見(「アゲアゲのノリ」)や強硬策を好む軍からは「弱く消極的」とされ(鈴木, pp.126-127), 一方また軍という官僚機構の前列踏襲的な「自転, する組織」(山本七平 1987, pp.51-52)の壁に阻まれ, その政策や作戦, 装備の改善等に影響を及ぼすには至らなかった。
- (12) 著者の信太正三は「旧制山形高校を経て東大文学部印度哲学科に進み, 途中転じて京大文学部哲学科を卒業した。文部省図書監修官在任中に応召」(信太, p.261)という経歴を有する甲種幹部候補生出身の陸軍将校である。後の所属部隊長であった神保信彦氏は信太氏について次のように述べている。

〈希にみる誠実清潔な人物で, 私の副官として全幅の信頼をよせていた。戦闘に際しても, 真面目で真正直な人間のみが示す勇氣ある行動が印象にのこっている。信太中尉(当時)によって, 私は軍人としてのインテリにたいして認識を新たにさせられた)〔…〕。(信太, p.261)

筆者が読んだ限りでは, 本書のような軍隊・実戦体験者による著書, とりわけ戦後の比較的早い時期に書かれたものは具体的に生々しく迫力があり, 資料的価値が大きい。その理由は, 記憶が鮮明であることと, 戦友をはじめとした多数の犠牲者への思いや, 千早の書名の副題にあるような無残に終わった戦争への反省などから〈これだけは後世のために書き残しておきたい〉との強い念が執筆動機であることによるものと思われる。これらは無数の戦争犠牲者の声を代弁するものであ

り、筆者はぜひこれをさらに後世に引き継ぎたい。関心のある向きは、参考文献で太字とした書籍に加え、下記もご一読いただきたい。

小松真一(2004)『虜人日記』ちくま学芸文庫(執筆は1946年。山本七平(2004)のもとになっているのが本書である。)

- (13) 幼年学校と士官学校については戸部、加登川、松下、山中、西浦、鈴木を、陸軍大学校については戸部、堀、西浦を参照。

少子化を背景として、近年は中学受験による生徒の早期からの囲い込みが盛んで、一貫校における高校からの入学募集の停止も増えている。一貫教育に長所があることは認める。しかしそこでく進学実績の向上)につながる教育技術上の利点ととかく世人の関心が集中しがちであることは問題である。目標は将来を託す人間の育成であり、肝要なのはそのために一貫教育という制度をどのように利用するかである。こうした点について考えるにあたっては、士官学校を経た陸軍将校における幼年学校出身者と一般中学出身者の資質や功罪などは一つの歴史的教訓として重要である。

- (14) 千早正隆は海軍大学校の教育について自らの経験から次のように指摘している。海軍の最高幹部の教育がこれであった。

海軍大学校がその教育で犯した最大の誤謬は、戦争をきわめて狭義に解釈し、その教育を戦略と戦術に限定し、学生に対して画一的な教育を実施したことであった。[...] **同校で教育したのは、いかにして海戦に勝つかであり、それ以上でもなければそれ以下でもなかった。**(千早, pp.293-294 太字原口)

- (15) キャベツや大根の産地などをはじめとして、単一栽培によって連作障害や地力の低下、病害虫の発生などの問題が広く発生していることは周知のとおりである。これは農業の工業化による効率の追求という人間の小賢しさに対する自然からの回答である。
- (16) これは高校生の学習動機の多くが入試の圧力によっており、入試科目の増減が受験者の数に影響するという今日の現象と同じであることは興味深い。
- (17) 日本側のこうした反英語政策とは逆に、周知のようにアメリカは「対日戦争開始と同時に、アナポリス海軍兵学校に日本語の講座を開設」し(井上成美伝記刊行会, p.389)、また日本語を専門とする将校・下士官を養成し、文化人類学者などに日本文化研究を行わせた。このことは戦争とことばや文化、そして〈実用性〉に対する彼我の認識の幅と深さの違いを象徴している。
- (18) 引用文中の「術科学校」とは、個別的専門技能についての海軍の実務教育・研修機関である。
- (19) 上で引用した信太正三も下の引用文中の「学士さん」である。また京都大学経済学部出身の経済学者の森嶋通夫は、海軍予備学生出身の暗号士として勤務し、暗号文作成の能率化とそのための器具を考案した(森嶋, pp.120-128)。情報参謀である堀の米軍戦法の研究を手助けし、これを冊子化して第一線部隊に配付するにあたり、「敵軍戦法早わかり」という読み手の関心を引く題名を提案したのは、慶應大学文学部出身の応召将校である掛川長平少尉であった(堀, pp.138-140)。沈没する輸送船で立派な退船指揮を行い(池辺, pp.216-225)、上陸したハルマヘラ島で小隊長として部下を統率した俳優の池辺良もまた立教大学英文科を卒業した甲幹出身将校であった。
- (20) これを象徴するのが文科省から2015年6月8日付で国立大学学長に宛てて出された「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」という通達である。本稿と関係する部分は下記のとおりである。

特に……人文社会科学系学部・大学院については、十八歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう務めることとする。(三谷, p.9から引用)

これについての室井による批判は、政府が「企業や工場での生産管理や品質管理のシステム、広

い意味での経営学的手法をそのまま大学に適用しようとしている」(室井, p. 207) という新自由主義的教育政策の有害性, 不毛性の核心を突いている。そしてこれはまた, 室井の指摘のように, 教育政策を超えて何よりも「私たちの文明全体に広がる重大な危機と一体の問題」(室井, p. 209) である。

そしてこうした政策に際して文科省は, 室井が「手続き型合理性」と呼ぶ「[...] 膨大な管理運営システムの『見かけ上』の合理性」(室井, p. 205) を 90 年代以降大学に持ち込み, 「『やる気のある大学』だけを選別しようとし」(室井, p. 225), そのために大学に「積極的な姿勢」を求める(室井, p. 224)。これはまさに〈旺盛不屈ナル攻撃精神〉を至上とした旧日本軍と同様であり, これはまたその帰結として旧軍の場合と同様に, これらを適当にやり過ごす〈要領〉や「員数」(山本七平 1987, pp. 134-151), やる気の充溢を装う「氣迫演技」, (山本七平 1987, pp. 161-163) などを必然的に誘発するであろう。そしてこれらの宿痾が規律の低下や無気力, 面従腹背, 作戦の空洞化などを生み, 軍と日本の自滅を招いたことは歴史が証明するとおりである。

- (21) 専門教育は発展的に大学院の修士課程も含めてこれを行うことを考える必要があるというのが筆者の意見である。昨今の日本では〈高学歴〉ということばが, 本来の意味から離れて, 入学困難大学在籍/卒業を指すものとして用いられている。このことは高偏差値=高学力=高学歴というガラパゴス化した教育・学力観を象徴するものである。周知のように偏差値とはある試験における得点が全体の中のどのあたりに位置するかを示す相対的指標にすぎない。したがって高偏差値は必ずしも絶対的な, そして国際的な水準も含めての知識の質と量や大学での勉学適性, 職業遂行能力などを保証するものではなく, 内に閉じた一種の銘柄指標にすぎない。

少なくとも文科系では圧倒的多数者が学部だけで高等教育を終了する日本は, 先進工業国の中では, 世界に冠たる〈低学歴国〉であることを認識すべきである。絶対的な学力, 専門的知識・能力などの向上という点で修士課程の2年は大きい。今後の〈国際化〉の中で, 専門的能力の高度化という面でもこれについての社会全体での積極的な検討と対策が必要である。

- (22) ドイツ語読解法の研究と実践, これに基づく本連載も筆者によるそのささやかな支援の試みである。
- (23) 堀は「情報は二線, 三線での交差点を求める式の取り組みをやらないと, 真偽の判断は難しい」(堀, p. 51) としている。
- (24) 一例として, 刑務所には障害者が少なくない。触法を余儀なくされる彼らをめぐる諸問題については, 山本讓司(2006, 2008, 2018) 参照。
- (25) もとより高等普通教育の充実のみによって今日の日本の諸問題が解決できるわけではない。しかしわれわれが生きている日本の社会と文化がどのようなものであるかを認識し, 相対化することができなければ何も始まらない。その一助として勤めるのは留学をはじめとして, 若いうちに国外に出ること, できれば旅行ではなく生活することである。

## 8. 文献一覧

(太字については註②参照)

阿川弘之(1986)『井上成美』新潮社

荒川洋治(2003)『忘れられる過去』みすず書房

千早正隆(1982)『日本海軍の戦略発想 敗戦直後の痛恨の反省』プレジデント社(執筆は1946-1947年)

江利川春雄(2016)『英語と日本軍 知られざる外国語教育史』NHK出版

藤原彰(2001)『餓死した英霊たち』青木書店

保坂正康(2005<sup>(1)</sup>)『陸軍良識派の研究 見落とされた昭和人物伝』光人社 NF 文庫

保坂正康(2005<sup>(2)</sup>)『「特攻」と日本人』講談社現代新書

- 堀栄三 (1996) 『大本営参謀の情報戦記 —情報なき国家の悲劇』 文春文庫 (備忘ノートの執筆は 1946 年頃)
- 池辺良 (1997) 『ハルマヘラ・メモリー』 中央公論社
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学 —言語と文化のタイポロジーへの試論—』 大修館書店
- 池田清 (1981) 『海軍と日本』 中公新書
- 井上成美 (1969) 『井上成美氏 荒崎放談 沈黙の雄弁』 『毎日グラフ別冊』 昭和 44 年 8 月号 毎日新聞社 (本記事は新名丈夫を聞き手とする井上成美へのインタビューである。なお引用部分は宮野に再録されている。)
- 井上成美伝記刊行会 (1982) 『井上成美』 井上成美伝記刊行会
- 猪瀬直樹 (2010) 『昭和 16 年夏の敗戦』 中公文庫
- 加登川幸太郎 (1996) 『陸軍の反省 (上)』 文京出版
- 松下芳男 (1956) 『明治軍制史論 下巻 —明治十一年より明治末年まで—』 有斐閣
- 三谷尚澄 (2017) 『哲学しててもいいですか? —文系学部不要論へのささやかな反論—』 ナカニシヤ出版
- 宮野澄 (1985) 『最後の海軍大将・井上成美』 文春文庫
- 室井尚 (2016) 『文系学部解体』 角川新書
- 森嶋通夫 (1997) 『血にコクリコの花咲けば —ある人生の記録』 朝日新聞社
- 森本忠夫 (1998) 『魔性の歴史 マクロ経営学からみた太平洋戦争』 光人社 NF 文庫
- 森本忠夫 (2002) 『貧国強兵 「特攻」 への道』 光人社 NF 文庫
- NHK 取材班編 (1993) 『大日本帝国のアキレス腱 太平洋・シーレーン作戦』 (ドキュメント太平洋戦争 1) 角川書店 (同シリーズの文庫版は、NHK 取材班編 (1995) 『日米開戦 勝算なし』 (太平洋戦争 日本の敗因 1) 角川文庫)
- 西浦進 (2014) 『昭和陸軍秘録 軍務局軍事課長の幻の証言』 日本経済新聞出版社
- 丹羽宇一郎 (2017) 『戦争の大問題 それでも戦争を選ぶのか。』 東洋経済新報社
- 大井篤 (1983) 『海上護衛戦』 朝日ソノラマ, (初版は 1953 年)
- 斎藤環 (2012) 『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』 角川書店
- 斎藤環 (2014) 『ヤンキー化する日本』 角川 one テーマ 21
- 信太正三 (1977) 『私の戦争体験史・新版』 理想社 (初出は 1968 年)
- 鈴木伸元 (2015) 『反骨の知将 帝国陸軍少将・小沼治夫』 平凡社新書
- 関口存男 (1979) 『趣味のドイツ語』 三修社
- 高橋辰夫 (1989) 『護衛船団戦史 日本商船団武器なき戦い』 図書出版社
- 戸部良一 (1998) 『逆説の軍隊』 (日本の近代 9) 中央公論社
- 戸部良一他共著 (1991) 『失敗の本質 日本軍の組織論的研究』 中公文庫
- 山中峯太郎 (1954) 『陸軍反逆児』 小原書房
- 山本七平 (1987) 『一下総将校の見た帝国陸軍』 文春文庫 (初出は 1976 年)
- 山本七平 (2004) 『日本はなぜ敗れるのか —敗因 21 カ条』 角川 one テーマ 21 (初出は 1975-1976 年)
- 山本讓司 (2006) 『累犯障害者一獄の中の不条理』 新潮社
- 山本讓司 (2008) 『続 獄窓記』 ポプラ社
- 山本讓司 (2018) 『刑務所しか居場所がない人たち—学校では教えてくれない、障害と犯罪の話』 大月書店
- 吉田裕 (2017) 『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』 中公新書
- 渡辺洋二 (2003) 『彗星夜襲隊 特攻拒否の異色集団』 光人社 NF 文庫